

★ 葉いもち及び穂いもちの発生に注意！！ ★

7月中旬に行った巡回調査の結果、葉いもちは山城地域で平年比やや多く、南丹及び丹後地域で平年並、中丹地域で平年比少なく（表）、発生ほ場では進行型病斑（写真2）を確認しました。

また、向こう1か月の気温は平年並、降水量は平年並または多く、日照時間は、平年並または少ないと予想されています。

今後は、移植時の長期持続型箱施用薬剤の効果が低下する時期となり、気象条件によっては、葉いもち及び穂いもちが多発することが予想されますので、葉いもちの発生が多い場合は、治療効果がある薬剤などで防除を徹底しましょう。

表 葉いもち巡回調査結果(7月第3半旬)

	項目	本年	平年値
山城	発生ほ場率(%)	33.3	21.4
	発病株率(%)	20.0	3.8
	発病葉率(%)	10.7	1.0
南丹	発生ほ場率(%)	22.2	34.1
	発病株率(%)	12.4	18.3
	発病葉率(%)	3.4	5.6
中丹	発生ほ場率(%)	0.0	27.6
	発病株率(%)	0.0	6.8
	発病葉率(%)	0.0	1.9
丹後	発生ほ場率(%)	0.0	8.7
	発病株率(%)	0.0	1.9
	発病葉率(%)	0.0	0.5

☆防除上の留意事項☆

- (1) 上位葉へ進展した葉いもちの病斑は、穂いもちの重要な伝染源となる。
- (2) 穂ばらみから出穂後約3週間、日照時間が少なく多雨多湿であると発生が多くなる。
- (3) コシヒカリ、ヒノヒカリ、祝など発病しやすい品種や、すでに葉いもちが多発している田、山間部では特に注意し、防除適期に薬剤防除を実施する。
- (4) 出穂後曇雨天が続く場合には、傾穂期前後にも防除を行う。特に枝梗は遅くまで菌の侵入を受けるので、枝梗いもちの発生に注意する。

(5) 葉いもちの発生が多い場合は、治療効果がある薬剤（カスガマイシン剤：商品名カスミン剤等、フェリムゾン・フラサイド剤：商品名ブラシン剤等）で防除する。

(6) 粒剤は種類により施用時期が決まっているので、適期に施用する。

(7) カメムシとの同時防除剤を使用する場合は、出穂直前から穂揃期に散布する。

(8) 平成25年度に中丹地域、平成26年度に南丹地域の一部においてストロビルリン系薬剤（QoI剤）耐性菌の発生を確認した。耐性菌の発生地域ではいもち病に対するQoI剤の使用を中止し、他系統の薬剤（抵抗性誘導剤、MBI-R剤等）を使用する。

QoI剤を使用したほ場で、防除効果の低下が疑われる場合は、他系統の薬剤で追加防除を行うとともに、速やかに病害虫防除所または、関係機関に連絡する。

詳細は京都府病害虫防除所ホームページ

(アドレス http://www.pref.kyoto.jp/byogai/documents/news20131113_2.pdf)

を参照のこと。

(9) 防除の際には、周辺ほ場に農薬が飛散しないよう十分に注意する。

(10) 農薬の選択に当たっては普及センター、農協等と相談し、使用時期（収穫前日数）や使用回数等の使用基準を遵守して適正に使用する。なお、最新の農薬情報は農林水産省ホームページの「農薬コーナー」の「農薬情報」を参照のこと。

(<http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/index.html>)



写真1 葉いもちの症状



写真2 進行型病斑